

外國醫師

東都本街傳馬街者、巨賈所居也、近坊醫家、有賴此兩街而爲生活者數人焉、每朝醫者往其商家、診僮僕之病者、回家調劑、乃連竈煎煮數人藥、入陶器、以小箋記患者姓名、糊黏其上、乃肩奴以致各家、必不勞病家臧獲也、雖無患者之時、醫日往問寒暄、猶仕主家、世俗呼之曰陶器醫、都下雖廣大、未聞他處有此風也、蓋此媚醫之所、遂爲習耳、說此於他邦人、未爲信焉、

〔奇魂〕醫藥名義

外國の人に、病を治させ給しは、新羅より使に奉し金波鎮漢紀武と云が、允恭天皇に藥を奉しぞ始也ける、されど後には宇多天皇の、京に唐人を入ることを禁たまひ、小松大臣の、漢醫に病を治させざりし類も有き、其比は珍しにもあらねど、二荒山の御神徳川家康の三河國に在し、頃、癰を患給しに、當時支那より、醫の來居たるに治させむと臣等の申し、かども、御國の耻なりとて、痛く否て容易は許まさりしこそ尊けれ、

〔古事記允恭〕天皇、初爲將所、知天津日繼之時、天皇辭而詔之、我者有一長病、不得所知、日繼、然大后始而諸卿等、因堅奏、而乃治天下、此時新良國主、貢進御調八十一艘、爾御調之大使、名云金波鎮漢紀武、此人深知藥方、故治差帝皇之御病、

〔日本書紀九三〕三年正月辛酉朔、遣使求良醫於新羅、秋八月醫至、自新羅、則令治天皇病、未經幾時、病已差也、天皇歡之、厚賞醫、以歸于國、

〔日本書紀欽十九〕十四年六月、遣内臣名闕使於百濟、中勅云、所請軍者、隨王所須、別勅醫博士、易博士、曆博士等、宜依番上下、令上件色人、正當相代、年月宜付還使相代、十五年二月、百濟中貢中醫博士、奈卒王有悽陀、

〔小右記〕長和三年六月廿五日己卯、入夜、清賢師從鎮西來談雜事、持來治小兒病、中生虫之藥、予原實資、乞遣來自大宋國之醫僧許清、號惠、清賢師者、爲按察納言使、令資砂金十兩、遣彼醫師所、令交易治眼